

## 特集にあたって

森 雅夫 (東京工業大学)

20年ほど前、竹内啓・鳩山由紀夫両氏の担当で2年続けて「スポーツのOR」が特集された。スポーツを数理科学の側面から照射したものである。この分野はORSAでは、人気のあるセッションとして確立しているようである([1], [2])。また、前回のAPORSの会議においても、オーストラリアン・フットボールの話題を中心に盛り上がっており、些かあっけにとられたものである。日本では、単発的にいくつかの研究や竹内・藤野両氏の本もあるが、未だまとまった分野としての活動がなされていない。

前回は数理科学者の目からスポーツを眺めていたが、今回は趣向を変えてスポーツの現場の人たち、つまりコーチやスポーツそのものの研究者たちが、ゲームをどのように分析し、その結果を練習方法やゲームの作戦に生かしていこうとしているかを探ることを主眼とした。スポーツの戦術の記述的な分析としては[3]をはじめ、各種目毎に多くのものが書かれている。ここでは、ORのタネになる話題を紹介したいと考えた。

最初は東映の水原監督時代に捕手として活躍された日本ハムファイターズの安藤順三氏にスコアラーの目を通した野球の分析についてお話いただき、それを野球に詳しい編集委員の猿渡氏と編集長がまとめたものである。スコアブックの記録をどのように整理し監督・コーチの作戦に資する情報を提供しているかを中心にお伺いした。年俸査定にどのような指標を使うかなど興味津々の話もあったが、残念ながらオフレコである。米国では野球へのマルコフ連鎖によるアプローチが盛んに試みられているが、現段階でのその総まとめとも言える[4]の中で、そのモデルで計算される指標の1つが年俸査定に参考にされているようである。

次にサッカーの話題を2つ。日本代表選手として長年活躍された元読売日本サッカークラブ監督の加藤久氏には、サッカーの戦術とそれを支援するためのコンピュータ分析の現状と問題点について書いていただいた。戦術の大きな流れを語る中で、所々監督としての加藤氏の目が光っているように思われる。

筑波大学の山中邦夫氏には昨年(Wカップ)での日本

代表チームのゲーム内容をコンピュータの記述分析システムを用いて分析していただいた。その結果と実際の観戦から総合された考察には傾かされる点が多い。

広島大学の渡辺和彦氏には長野オリンピックで大活躍したスキーのジャンプ陣を科学的な側面から指導された経験を書いていただいた。V字の姿勢を決めるプロセスや、船木・原田両選手の戦術の比較はまことに興味深い。

最後は趣向を変えて、松井知巳氏にスポーツのスケジューリングの問題を紹介していただいた。21世紀に向けてスポーツマネジメントの分野もますます重要なものとなって来よう[5]。

私事になるが、今年の2月7日(土)の昼頃、編集長から電話で今回の企画の依頼があった。[4]を紹介してくれた学生を思い浮かべながら、彼を巻き込めばなんとかなるだろうと気安く引き受けてしまった。ところが、その彼が私の電話していた将にその頃、自宅でコンピュータに向かいながら心臓発作で突然亡くなってしまった。茫然自失の思いであった。暫くして、手探りで組み上げたのが今回の特集である。この場をお借りして、故本林洋平君のご冥福をお祈りすると共に、私の我が侘を聞き入れて下さった著者の方々に心からお礼を申し上げたい。

この特集を契機にスポーツのORが学会発表等でも賑やかになることを願う次第である。

### 参考文献

- [1] 大山達雄監訳：「公共政策ORハンドブック」, 朝倉書店 (1999)。
- [2] 森村, 刀根, 伊理監訳：「経営科学OR用語大事典」, 朝倉書店 (1999)。
- [3] ヤーン・ケルン：「スポーツの戦術入門」(ドイツスポーツ連盟コーチアカデミー・テキスト), 大修館書店 (1998)。
- [4] J.L.Palacios：“A Markov Chain Approach to Baseball”, Opns. Res, Vol.45, No.1 (1997)。
- [5] 日本スポーツ産業学会監訳：「スポーツマネジメント」, 大修館書店 (1995)。